

外国につながる子どもへの関わりを通じた フィールドワーカーの自己理解

竹宮彩香

(愛媛大学大学院教育学研究科心理発達臨床専攻)

研究の目的

近年、日本に在住する外国人の数は増加している。日本の安全性や労働環境を求め、家族で日本に暮らすケースは多く、その中でも親についてきた子どもたちは、様々な生きづらさを感じている。例えば、フィリピンから日本へ移動した子どもの多くは、日本の学校に通い始めた時から、同級生がよそよそしいと感じたり、通い始めた当初は温かく迎えられたものの、時間が経つにつれて距離を置かれるようになったと感じたりするといった報告がある(矢元, 2018)。

筆者はそのような子どもの適応を促す取組に関心を持っていることから、実際に地域で外国につながる子どもたちの支援をしている取組に参与観察することにした。参与観察では、観察する研究者自身の振る舞いが見え方に影響する。筆者自身の子どもたちとの関わり方を効果的なものにするためにも、自身の自己理解を進めながら観察対象となる子ども理解を同時に進めるようなセルフスタディが必要である。そのため、本研究ではフィールドでの筆者自身の自己理解に焦点化して分析をおこなうこととした。

方法

対象者 筆者は、A 県の B 会が主催する、外国ルーツをもった小学生と中学生が参加する夏休みイベントにボランティアスタッフとして 2023 年 7 月 29 日から 2023 年 8 月 30 日の間で 7 日間参加した。今回のフィールドワークを通して、筆者と最もかかわりが多かった中学 3 年生の女子 Z を主な観察対象とした。

実施方法 ボランティアに実際に参加しながら、1 日の流れや、参加者と筆者の気になる言動を現場メモとして残した。その後、フィールドノーツを作成し、それをもとに KJ 法を用いて行動のグループ分けを行った。

結果

フィールドノーツから、筆者と Z の行為に相当する書き込みを抜き出した。その後、それらをど

のような行為であったかカテゴリー名をつけながら分類した。

筆者の行動としては、「場当たりの対応」、「働きかけることへの戸惑い」、「効果的でない支援」、「スタッフや他学生への依存」がみられた。一方、Z の行動としては、「消極的なコミュニケーション」、「勉強への熱心な取り組み」がみられた。筆者と Z の相互的な行動としては、「緊張行動」、「好意的な反応」、「共通の話題の提供」、「続かない会話」がみられた。

また、同じボランティアに参加した他学生の行動として、「自主的な行動」がみられた。

考察

行動を分類した結果、筆者の行動と Z の反応は密接に関連することが示唆された。同時に、筆者の行為には、筆者自身の至らなさや準備不足に関する感情的な反応が付随していることが多いことも顕著な特徴として明らかになった。

同じボランティアに参加した他学生からは、主体的な行動が多くみられた。積極的に子どもと関わろうとする姿勢は、子どもに伝わっており、結果、信頼関係が深まっている良好な関係が形成されていた。しかし、彼らと比較すると、筆者には主体的な行動がかなり少なかった。筆者は「スタッフや他学生への依存」が多くみられ、「古典の問題が分からず R さんに助けを求めてしまったため私は、もう少し勉強してきた方がいいかなあと落ち込んでしまった。」のように、直面した課題や状況に対して感情的な反応がみられた。

今回の研究を通して、特に筆者の行為の特徴が明らかとなった。これらの気付きはフィールドワークに必要な自己理解プロセスであるといえる。

引用文献

矢元 貴美(2018). フィリピンにルーツを持つ子どもたちの困難 —日本の学校で学ぶ子どもたちに焦点を当てて— 多民族社会における宗教と文化, 21, 3-15.